

ジョージ・ハーバートの 聖職者になることへの逡巡（後）

—ジョン・ダンの「聖職者になったティルマン氏に」と関連して—

山根 正弘

[前編概要] ジョン・ダンの影響を直接、間接に強く受けた宗教詩人ジョージ・ハーバートは、ケンブリッジ大学の大学代表弁士そして国会議員にまでなった地方出身のエリートであったが、最後はソールズベリー近郊の僻村ベマトンの教区牧師となった。伝記作家ウォルトンによると、ハーバートは宮廷での昇進を夢見ながらも、自身の才能を神の栄光に捧げるという信条を捨てきれず、どちらの道を選ぶべきか逡巡し心の葛藤を経験したという。ハーバートが政治の要職を諦め神の栄光を讃えるため、身を落として片田舎に隠遁し教区民のために牧師になったという見方は、以降支配的となる。もし、ハーバートが聖職者になることをためらったとすれば、その原因は何であろうか。ティルマンのように、聖職者に相応しくないと自ら感じていたのであろうか。それともダンが提示したように、当時社会的に蔑まれていたがゆえに、進んで聖職者になることにためらいを感じていたのであろうか。ハーバートが聖職者になることを逡巡した理由を、先例とも模範ともなったダンの「ティルマン氏に」を手がかりに解明する。第I章では、ティルマンとダンとの関係をペンブルック伯の文学サークル内での宗教的なパロディの観点から論じ、第II章では、伝記事実を踏まえながらハーバートが経験した心の葛藤を詩や手紙の中に求めた。(2006年3月発行『英語英文学研究』第58号 所収、pp. 73-90)

Ⅲ 軽蔑される聖職者

ウォルトンによると、1626年頃、ハーバートは宮廷での栄耀栄華を諦めて、聖職者になるべきかどうか真剣に迷ったという。その心の葛藤を経て覚悟を決めたあと、宮廷の友人に聖職入りを打ち明けたところ、その友人はハーバートに決心を翻すよう説得した。なぜなら、彼のような天与の才能をもち、身分の高い者にとっては、僧職はあまりにも卑しい仕事であるというのだ。友の説得にひるむことなく、ハーバートは次のように決意を披瀝した。

It hath been formerly judged that the Domestick Servants of King of Heaven, should be of noblest Families on Earth: and, though the Iniquity of tha late Times have made Clergy-men meanly valued, and the sacred name of Priest contemptible; Yet I will labour to make it honourable, by consecrating all my learning, and all my poor abilities, to advance the glory of that God that gave them... (Walton, 277)

(天の主、神に仕える家僕[聖職者]は、この世では貴族出身であるべきだと、かつては考えられていた。近頃は不当な考えによって、聖職者の評判も地に落ち、司祭という神聖な名も軽蔑されるようになったが、けれど私は、もてる学識のすべてと僅かながらの才能をすべて、それを与えてくださった神の栄光を高めるために捧げることにより、聖職者の名誉回復に尽くしたいと思う。)

ウォルトンよりもまえにハーバートの小伝をまとめた『ハーバート遺文集』(*Herbert Remains*, 1652)の編者バーナバス・オーリー (Barnabus Oley) は、ハーバートが聖職者になったことは名門の品位を落とすことであった、との世間の非難を紹介している。「『聖堂』の著者である詩人のジョージ・ハーバート氏は、当代でも稀な思慮分別と教養を身に付けた人物であるが、その氏をある人が真面目に次のように非難するのを聞いたことがある。つまり、彼は立派な才能を無駄遣いし、出世にも役

立てず、自身を見失い、身を落とすことになった、と。その言葉は今でもよく憶えている」²⁶⁾。ウォルトンは伝記の材料として、兄エドワード・ハーバートの自叙伝で描かれた弟の聖人像とオーリーの小伝を用い、「ベマトンの聖人」を巧妙に創り出しているかのようだ。

ハーバートとウォルトンは、同じ年に生まれた同時代人である。だが、ハーバートは、ほぼ40歳でこの世を去ったのに対し、ウォルトンは生き長らえて、1683年に90歳で亡くなっている。ウォルトンがハーバートの伝記を書き始めたのは、1660年の王政復古後であり、内乱を経たあとの異質な社会状況のもとでハーバート伝は仕上げられた。また、ウォルトンには、聖人伝を記すという意図があったので、場合によっては、デフォルメされた形でハーバートの生涯が伝えられている²⁷⁾。では、ハーバート自身は、聖職者が人々から軽視される状況をどのように感じていたのだろうか。次に、ハーバートの作品の中から、聖職者の社会的身分の低さとその蔑視される状況を見てみたいと思う。

ハーバートの「教会の袖廊」に、聖職者の社会的身分の低さを暗示する一節がある。担当の教区で実際その任に就いていたハーバートは、説教者の言葉や言い回しをからかってはいけないと説く。その理由は、彼がどのような立場の者であっても、神の遣いに違いないからという。

And love him [preacher] for his Master: his condition,

Though it be ill, makes him no ill Physician. (“The Church-Porch” 443-4)

(彼の主ゆえに、彼[説教師]を敬愛しなさい。たとえ、彼の地位が／卑しかろうとも、それによって悪しき医師[救済者]とはならないから。)

せっかく教会に足を踏み入れ、説教に耳を傾けたとしても、当の説教者を馬鹿にしたら、いくら素晴らしい説法であれ、なんら得るものもなく教会を後にすることになってしまう、その危険性をハーバートは指摘している。その指摘の背景には、貴族・上流階級の者及びその子弟が、聖職者の社会的に地位・身分ゆえに、彼らの説教を愚弄する傍若無人な振る舞いが横行していたと思われる²⁸⁾。

『田舎牧師』第19章には、上流階級の子弟があまり聖職者にならなかった事実が読み取れる箇所がある。牧師は、近隣の教区と絶えず連携を取り合うばかりではなく、身近に接し交流を持つように奨められる。

Likewise he [the Countrey Parson] welcomes to his house any Minister, how poor or mean soever, with as joyfull a countenance, as if he were to entertain some great Lord. (*Works*, 253)

(同様に彼〔田舎牧師〕は、たとえその人物が貧しく卑しかったとしても、あるお偉い領主をもてなすかのように、満面に笑みを浮かべて、いかなる聖職者をも家に迎え入れなくてはならない。)

聖職者の僧禄は官職に比べてかなり低く、彼らの生活状況はむしろ苦しかった。才能や功績によってではなく、財産や収入の多寡で人間の価値を判断するとすれば、上流階級の人々にとって、聖職はその子弟に就かせたくない仕事の一つであった。ハーバートのように、名門出のエリートがあえて田舎の聖職者になるとは、当時の階級意識からすると、狂気の沙汰であったと思われる。だからこそ、ウォルトンはハーバートを聖職者の模範と仰ぎ、「聖人」に祭り上げることができたのである。

『田舎牧師』の第28章では、聖職者が軽蔑されるのは、宿命であるとまで断言されている。そのタイトルは、文字通り、「軽蔑される牧師」(“The Parson in Contempt”)である。冒頭部分を次に引用してみよう。

The Countrey Parson knows well, that both the generall ignominy which is cast upon the profession, and much more for those rules, which out of his choyssest judgment hee hath resolved to observe, and which are described in this Book, he must be despised; because this hath been the portion of God his Master, and of Gods Saints Brethren, and this is foretold, that it shall be so still, until things no more. Neverthelesse, according to the Apostles rule, he endeavours that none shall despise him; especially in his own Parish he

suffers it not to his utmost power; for that where contempt is, there is no room for instruction. (*Works*, 268)

(田舎の牧師は、次のことをよく心得ておかななくてはならない。つまり、その聖職に課せられた社会一般の汚名と、さらに自ら選んだ判断で遵守しようと心に決めた規則(その規則はこの本の中に述べられているが)のために、牧師は軽蔑されるということ。なぜなら、これは、神とその聖徒たちが定めた宿命であり、世の終わりまでずっと変わらないと予め定められているので。それにもかかわらず、使徒[パウロ]の規程[テモテへの手紙(1)4章12節]によれば、牧師はだれからも軽蔑されないよう努力すべきである。特に、担当の教区においては、力の限りを尽くして、軽蔑されないように。というのも、軽蔑あるところに、教導の余地はないから。)

ハーバートは、ここで聖職者が馬鹿にされる理由を二つ挙げている。一つは、これまで見てきたように、階級意識に基づく蔑視である。もう一つは、牧師の規則・義務に存し、『田舎牧師』に詳しく述べてあると言う。以下に、田舎牧師の務めの中に、聖職者蔑視の原因を探ってみたいと思う。

『田舎牧師』は、ハーバートが理想とした聖職者のあるべき姿を記した散文のある種マニュアルで、チャーサーの『カンタベリー物語』の総序に登場する教区司祭の亀鑑を具象化したかのような作品である。その中で、ハーバートは職務としての宗教的な儀式の執り行ない方や祈りの規定ばかりではなく、日常の私生活に至るまで、聖職者の果たすべき義務・役割を詳細に描写している。例えば、その第14章「巡回する牧師」(“The Parson in Circuit”)では、田舎の牧師は、平日の午後、教区内を巡回して家庭訪問をしなければならないと言う。日曜の取り繕った姿ではなく、ありのままの生活状況を見て、教区民を指導せよというのである。彼らが祈りの最中であれば、その行為を誉め、さらにもっとお勤めに励むように促す。読書中であれば、良書を与える。傷の手当をしていれば、薬草の調合の仕方を教え、傷の手当が神によって評価される行為であることを示し、さらにその治療を召使いの手に委ねず、常に自分たちの手で行なうよう導く。そういう次第で、牧師は教区内の家庭訪問を

次々となして行くのであるが、実際問題、その中には、ハーバートがあえて訪れたくない家もあったのかも知れない。彼自身を戒めるかのように、どんな家であろうと避けてはいけなと厳しく命じる。

Wherefore neither disdaineth he to enter into the poorest Cottage, though he even creep into it, and though it smell never so lothsomly. For both God is there also, and those for whom God dyed: and so much the rather doth he so, as his accesse to the poor is more comfortable, then to the rich... (*Works*, 249)

(それゆえ、牧師は、極貧の人の家を訪れるのを嫌がってはいけな。たとえ、這うようにして家に入ったり、その家が非常に嫌な臭いがしたとしても。神はその家にもおられて、そういった人々のために命を落としたのであるから。だからこそ、なおさら牧師は、お金持ちの屋敷に通うよりも、貧しき者の家に行く方が楽しいと思えるようになりなさい。)

貧しい人の家の構造、悲惨な生活状況が間近に伝わってきそうな描写であるが、田舎牧師の役割は、まさにそのような人々との接触にあった。なぜなら、「宗教は常に貧しき者に味方し」(“The Church Militant” l. 252)、「貧しき者はイエス・キリストの似姿」(“The Church-Porch” l. 380)であるので。また、ハーバートは病身の母親に宛てた手紙(1620年12月6日付)で、「山上の垂訓」を引用して、「聖書では、神の祝福は富める者ではなく、貧しき者に与えられる。金持ちや貴族が祝福を与えられるのを目にすることはない。『柔和な人々は幸いである、貧しい人々は幸いである、悲しむ人々は幸いである、その人たちは慰められる』」と、したためている²⁹⁾。

ハーバートの「贖い」と題するソネット形式の寓話詩でも、話者が探し求めていた主イエスを見出すのは、社会のあふれ者の間である。ある富める地主・領主の小作人であった話者が、あまり作物が育たないことに業を煮やし、その契約を取り消し新しい農地を借りようと決心した。そこで、天上の荘園に領主を訪ねたが、入れ違いに地上に降りたところだという。

I straight return'd, and knowing great birth,
Sought him accordingly in great resorts;
In cities, theatres, gardens, parks, and courts:
At length I heard a ragged noise and mirth
Of theeves and murderers: there I him espied,
Who straight, Your suit is granted, said, & died. ("Redemption" 9-14)
(即座に戻った。そして、高貴な生まれであるのを知っていたので、／相応に、身分の高い人が集まりそうな処を探した、／都市、劇場、庭園、獵園そして宮廷などを。／ついに、ぼろを着た強盗や殺人者が浮かれ騒ぐ声を聞いたが、／そこで、その方を見つけた、／即座に「君の願いは叶えられた」と言われて息絶えた。)

ハーバートが赴任したソールズベリーがあるウィルトシャーでは、囲い込みが行なわれていた。ハーバートの庇護者ペンブルック伯爵が治めていた領地でも、それに抵抗し暴動が起きていた。さすがに、伯の居城ウィルトン・ハウス周辺では、巧みに懐柔して、平穏を保っていたらしいが、ハーバートは、そのような状況を踏まえ、さらに福音書の記述を織り交ぜながら³⁰⁾、本当に宗教が必要な人とはどのような類の人々か、聖職者の使命はどこにあるのかを、寓話仕立てに示している。

1601年の貧民救済法 (The Poor Law Act) 以降、貧民の救済は地方行政に委ねられ、各教区が彼らに職を斡旋したり、地方税の一部を生活の援助に充てた。実際には、教区の治安判事を中心にして、教区牧師や選出された教区委員 (churchwarden) 等がその任務に就いた。なお、貧民救済法は、『田舎牧師』第12章では、“excellent statute” と呼ばれている。「彼はまず第1に、自分の担当する教区を見渡して、物乞いや怠け者が教区内に一人として存在せず、すべての人が安楽な生活を営むに足る資産があるように気を配らなければならない。このことを彼は、お金や説得そして教会の權威によって、つまりすべての教区が独自に維持・運営するのを義務づける、あの素晴らしい法令を利用して、成し遂げなければならない」(下線筆者)³¹⁾。

ダンの「ティルマン氏に」においても、聖職者の役割として、社会的弱者の救済

が重視されている。

*Maries prerogative was to beare Christ, so
'Tis preachers to convey him, for they doe
As Angels out of clouds, from Pulpits speak;
And blesse the poor beneath, the lame, the weak. ("To Mr. Tilman" 41-44)*
(マリアの特権はキリストを産むことであった。／司祭の特権は、神の言葉を伝えることである。／彼らは、天使が雲の中からするように、説教壇から語る。／また、身分の低い貧しい人、足の悪い人、弱い人を祝福する。) ³²⁾

教区牧師の役割は様々であるが、一番大切なことは、教区内の人々、特に生活に困っている人を、ある時には財政的な援助をし、またある時には説教をすることによって、神の教えに導くことである。キリスト教の本質とハーバートが考えていた慈善活動 (charity) ³³⁾ は、田舎の牧師の場合、家庭訪問から始まる。何度も足を運ぶことにより、親近感が生まれ、その親近感は信仰へ導く触媒となる。これはあくまでも推測であるが、ハーバートが聖職者になることを迷っていたとすれば、聖職者の社会的身分の低さとその蔑視の他に、もうひとつ理由として、彼に比べると身分の低い人々との直接的な接触を避けたいとの階級意識が、多少なりとも心の片隅にあったのではないかと思われる。

ウォルトンは、ハーバート伝で意図的に彼を称賛している場合がほとんどであるが、ただ一箇所、学生時代の欠点を挿入している。それは、生まれのよさと才能を鼻にかけ、劣った者とは距離を置き、着る服に凝っていたことである ³⁴⁾。これもウォルトン流の騙しのテクニックの一つで、学生時代に生まれと才能を誇っていたそのハーバートが階級意識を克服して、教区民に尽くす姿の立派さを際立たせるための伏線であるとも解釈できるが、やはり、将来を嘱望された若者の驕りであったと思われる。そのあと、大学での要職に就き下院議員となり、国の要職も手の届く範囲にあったが、突然庇護者の政治的な没落とともに、宮廷・政界への出世の道が閉ざされてしまう。才能あるエリートは苦渋の選択を迫られ、振り子の揺れから脱却

し、神の僕として生きて行く決意を固めたのである。

だが、周囲の状況からやむを得ず片田舎ベマトンに赴任したとしても、一旦決意を固めたあとは、ハーバートに若い頃の驕りや心の迷いは既になく、教区民との心の交流を大切にしながら、詩作・著述に励んだに相違ない。

むすび

ウォルトンには、模範となるべき国教会の聖職者が必要であり、ハーバートの生涯は格好の題材であった。したがって、ウォルトンが感動的に描いた伝記のうち、聖職者になるべきかどうかというハーバートの逡巡は、極端な言い方をすれば、伝記作家の想像の産物であったかも知れない。実際、ウォルトンは、ハーバート伝を書くにあたり、愛情を込めた眼差しで彼の生涯を辿り、都合よくハーバートの詩や散文を引用している。それを根拠に、ハーバート本人には、田舎の教区牧師に就任することに対し、もとより心の葛藤はなかったと考える向きもある。しかしながら、確かに、ウォルトンに聖人伝を書く意図があったにしても、ハーバートを直接知る友人・知人が、伝記が初めて出版された1670年には存命であり、彼らが異議を唱える可能性が十分にあるので、ありもしない人生を捏造することもできなかったはずである。地方エリート of ハーバートに、政界での出世を諦めて田舎に隠棲することへの抵抗は、確かにあったと私は思う。

判っている限りでは、聖職者になることへのためらいを最初に表明したのはティルマンであるが、ダンはその返事の形を借りて独自の考えを展開した。ハーバートは、ダンの文言をそっくり借りて、それと判るように、自身の作品の中に嵌め込んだ。この一連のやりとりは、ペンブルック伯を中心とする派閥兼文学サークルの中で行なわれていて、文学的虚構・パロディと捉えることも可能であるが、地位・身分がそう卑しくもなく、才能に恵まれた者が国の要職に就けずにいたとき、彼らが聖職者にならざるを得なかったにしても、就任への戸惑いを文学的な形式で表現することは、極めてありうべきことではなかったかと思われる。

ハーバートが、聖職者になることをためらっていたとすれば、おそらくその時期は、

1624年に下院議員として議会に出廷した後のことで、彼はその場で凄まじいまでの政権抗争とそれに破れた者の惨めさを目の当たりにしたに相違ない。その頃、彼が属していたペンブルック伯派閥は政治的に没落の一途を辿り、それを直接の契機として、ハーバートは、学生時代から人生の目標と定めていた田舎の聖職者になる決意を固めつつあったと想像される。だが、階級意識を強く引きずっていたハーバートには、教区民との身近な交流は、できれば避けたい事柄であったが、それとともに、神の栄光を讃え、恵まれない人を救済したいという生涯の目標もあった。ハーバートの心の揺れがおさまるのは、1627年6月に母親が死に、翌月チャールズ王から荘園を賜った頃で、結婚相手を見つける1629年3月までには、田舎の聖職者になる心の準備はととのっていた。

註

- 26) "... our Authour (*The sweet singer of the Temple*) though he was one of the most prudent and accomplish'd man of his time, I have heard sober men censure him as a man that did not manage his brave parts to his best advantage and preferment, but lost himself *in an humble way*; That was the phrase, I well remember it." (Barnabas Oley "A Prefatory View of the Life of Mr. Geo. Herbert" (1652) in *George Herbert: The Critical Heritage*, ed. C. A. Patrides [London: Routledge & Kegan Paul, 1983] 76)
- 27) ウォルトンがハーバートの伝記を書くとき、どのような意図のもとで資料を用いたか、またその資料の使い方については、パット及びノヴァーを参照。(John Butt, "Izaak Walton's Methods in Biography," *Essays and Studies* 19 (1934): 67-84; and David Novarr, *The Making of Walton's Lives* [Ithaca: Cornell University Press, 1958] esp. 301-61)
- 28) ハーバートよりも10年ほど遅れて、エセックス州のやはり片田舎アールズ・コロンで副牧師となったヨーマン出身のラルフ・ジョスリンは、教区民から好かれていないのではないかという強迫観念を持っていたようである。「教会から出るとき、だれ一人として私に話しかけなかった。神よ、私は軽蔑されています」と嘆いている。(Alan Macfarlane, *The Family Life of Ralf Josselin: A Seventeenth-Century Clergyman* [1970; rpt. New York and London: Norton, 1977] 31)
- 29) "... the Blessings in the holy Scripture, are never given to the rich, but to the poor. I never find Blessed be the Rich; or, Blessed be the Noble; but, *Blessed be the Meek, and Blessed be the Poor, and, Blessed be the Mourners, for they shall be comforted.*" (*Works*, 373)
- 30) 「ところで、祭りの度ごとに、ピラトは人々が願ひ出る囚人を一人釈放していた。さて、暴動の時人殺しをして投獄されていた暴徒たちの中に、バラバという男がいた。(中略)ピラトは群衆を満足させようと思って、バラバを釈放した。そして、イエスを鞭打ってから、十字架につける

ため引き渡した。」(マルコ福音書15章6-16節)「また、イエスと一緒に二人の強盗を、一人は右にもう一人は左に、十字架につけた。」(同書15章27節;下線筆者)なお、聖書からの引用は、前編同様、『聖書 新共同訳』(日本聖書協会 1987年)による。

- 31) “He first considers his own Parish, and takes care, that there be not a begger, or idle person in his Parish, but that all bee in a competent way of getting their living. This he effects either by bounty, or perswasion, or by authority, making use of that *excellent statute*, which bindes all Parishes to maintaine their own.” (*Works*, 244; italics mine) この1601年の「エリザベス救貧法」については、クリストファー・ヒル『十七世紀イギリスの民衆と思想』圓月勝博他訳(法政大学出版社 1998年) 344-46頁参照。
- 32) 「宴会を催すときには、むしろ、貧しい人、体の不自由な人、足の不自由な人、目の見えない人を招きなさい。」(ルカ福音書14章13節) 同章21節参照。
- 33) “In brief, it {Charity} is the body of Religion, *John* 13-35. And the top of Christian vertues, I *Corin.* 13.” (*Works*, 244)
- 34) “... if during this time he exprest any Error, it was, that he kept himself too much retir’d, and at too great a distance with all his inferiours: and his cloaths seem’d to prove, that he put too great a value on his parts and Parentage.” (Walton, 270)

[補註] ハーバートの伝記研究で著名なエイミー・チャールズによると、世俗の立身出世かあるいは神の栄光か、そのどちらを選び求めるべきかという二律背反する心情に関して、ダンがハーバートに影響を与えたのか、あるいはその逆かは、現在のところ、結論が出ていないという。その理由は、それぞれの詩作品(「テイルマン氏に」と「教会の袖廊」)がおおよそその創作年代は推定がなされているが、特定がなされていないからだという。(Amy Charles, *A Life of George Herbert* [Ithaca: Cornell University Press, 1977] n54, p. 84)

ハーバート作品集の編者ハッチンソンは、極めて常識的に、先輩詩人から後輩への影響を指摘する。(Works, 477n) マルカラムソンも、それを前提にペンブルック伯の文学サークル内での影響関係を中心に論を展開している。(Cristina Malcolmson, *Heart-Work: George Herbert and the Protestant Ethic* [Stanford: Stanford University Press, 1999] 77-81)

だが一方、ウォルトンの伝記を科学的に検証したノヴァーは全く正反対の説を唱える。つまり、世間的に著名な説教家が青年ハーバートを強く意識して、類似する語句を自分の詩作品の中に採り入れたと主張する。地位も名声もない一青年ハーバートの葛藤に刺激され、大説教家がかつての自分の姿にダブらせて心情を吐露したとするなら、やはり確証はないものの、通常考えられるのとは正反対で、その意味ではユニークで示唆に富む仮説である。(David Novarr, *The Disinterred Muse: Donne's Texts and Contexts* [Ithaca: Cornell University Press, 1980] 108-15; Cf. Arthur F. Marotti, *John Donne, Coterie Poet* [Madison, Wisconsin: The University of Wisconsin Press, 1986] 277)